

## カタルーニャの製紙

### -カペジャーデス紙工場博物館にみる 18 世紀スペインの製紙工場-

笠原 健司

#### はじめに

カペジャーデス市 Capellades は、スペインのカタルーニャ自治州、バルセロナ県にある小さな町である。人口 5,500 人程度、標高は 352 メートル、バルセロナから出ている公共交通機関も少ない。

カタルーニャ自治州の首都バルセロナから車で 40 分ほど山道を走ると、9 世紀から続く修道院を有するモンセラット Montserrat の山々[fig. 1]が見えてくる。奇岩が織りなす聖なる山には緑も映え、乾いた大地と低木のイメージがあるスペインの大地とはずいぶん異なる景色が広がる。本調査報告で紹介するカペジャーデスの紙工場博物館はこのモンセラットにほど近い山間にある。



fig. 1 モンセラット山と修道院

この町のほぼ中心に位置するカペジャーデス紙工場博物館 Museu Molí Paperer de Capelladesはカタルーニャ自治州の文化庁による科学・技術博物館N.A.C.T.E.C. (Museu de la Ciència i de la Tècnica de Catalunya) の一機関として 1958 年に設立された博物館である。

18 世紀から 20 世紀初頭にかけて存在した「ビラの製紙工場」El Molí de la Vilaを転用した建物で、外装・内装とも当時とほとんど変わらないという[fig. 2]。四階建ての愛想のない建物ではあるが、脇には美しい水をたたえた貯水池bassa(balsa)<sup>1</sup>があり、町の中ではモニュメンタルな場所である。この町には 19 箇所の水車を備えた工場の跡地や遺構があるが、その中の 16 箇所は製紙のための工場であった。



fig. 2 カペジャーデス紙工場博物館

筆者は 18 世紀のスペインで使われていた版画技法について研究を行っている。マドリードの版画院や王立印刷所で刷られた版画の紙にこの地方で漉かれたものが含まれていることがわかり、カペジャーデスの調査を始めた。18 世紀、スペインではフランスやオランダ、イタリアからの輸入紙に加え、国内で産したものも出回っており、その多くがカタルーニャやバレンシアで作られたものであった<sup>2</sup>。

ここで簡略ではあるが、スペインの製紙の

歴史についてふれておこう。紙は中国で蔡倫によって改良され、その後中央アジアから北アフリカを経て南欧に製紙技術が入り、イベリア半島では南部のコルドバや地中海側のバレンシアへと伝播した。

バレンシア地方ではハティバ(「ハチバ」とも)<sup>3</sup>で作られた紙が非常に優れていたという記述(1151年頃)が残っている。(これについては「補説：ハティバと製紙」でふれている。)イベリア半島では10世紀になると、製紙業はアンダルシア、地中海沿いへと広がり、13世紀の終わりにはイベリア半島全土に広がる。中世を通して培われた製紙術は大きな発展を遂げることはないが、その後イタリアやフランス、オランダなどで発達した水車の技術が導入された工場により、15世紀から息を吹き返す。

カタルーニャに製紙工場が作られるのは15世紀の終わりで、バルセロナに近いサント・マルティ Sant Martí においてである。17世紀になると、主に北カタルーニャに製紙工場が多数出現し、最盛期の1790年から1800年の間にはカタルーニャ全土では170箇所もの製紙工場が存在していた。その中でも、ラ・リバ La Riba の26箇所、カペジャーデスの17箇所、サン・ペレ・デ・リウデビトゥジェス Sant Pere de Riudebitulles の12箇所、ラ・トレ・デ・クララムー La Torre de Claramunt の8箇所は多くの製紙工場を有していた例である。

また、カタルーニャ以外では、18世紀に銅版画家を多く輩出したバレンシアのアルコイ Alcoi でも35箇所の製紙工場が存在していた。いずれも内陸で、豊富な水量の河川や湧水のある土地である。

現在の紙工場博物館である「ビラの製紙工場」の建築物および中で稼働していた機械・

装置は、18～19世紀のカタルーニャ地方における製紙工場の典型的な例であるという。ちなみにこの建築物はマシア Masia と呼ばれる農家の建築様式で、住居と納屋、仕事場が合わさったものを指す。

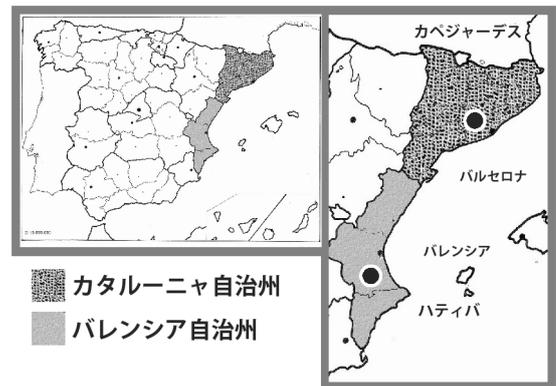


fig.3 カペジャーデスとハティバの地図上での位置

本稿は、この「ビラの製紙工場」でカタルーニャ製紙の最盛期に行われていたその行程と、工場の動力である水車、そしてその水源についての調査報告である。使用した基本文献は『カペジャーデスの紙工場博物館』<sup>4</sup>で、カタルーニャ語で書かれている。邦訳にあたり、カタルーニャ語—日本語の辞書には製紙に関する用語の掲載が少なかったため、ほとんどの箇所はカスティジャ語に訳してから邦訳している。製紙に関わる用語の特定や定義は今後も課題であるため、試訳とさせていただきたいが、解釈には王立スペイン語アカデミーの辞書<sup>5</sup>を使用し、曖昧な表現は避けるようにした。

また、本稿に掲載した写真は、特に断りの無い限り、筆者の撮影によるものである。撮影は2010年6月であるが、博物館内の設備の保存状態は非常によいため、18世紀の製紙工場の様子を具体的に伝えてくれるであろう。

## 1. 紙工場の構造

「ビラの製紙工場」は地階のある四階建ての直方体の建築物[fig. 4]であり、敷地面積は2,200 平方メートルである。地上階の床面積は全て同じだが、水車を含む紙の製造を担う場所であるため地階のみ若干広く作られている。

地階は大きく分けて三つのスペースに分けられている。一つ目は紙の材料となるボロの選別や下処理を行うスペース、二つ目はプレス機や紙の材料を溜めておく水槽、紙漉き行程のための設備があるスペース、三つ目は水車で駆動するスタンパーのあるスペースである。

水車は建物の外に取り付けられており、三つ目のスペースはこの水車から伸びるシャフトに近い場所にある。また、貯水池[fig. 5]から地下の水車に水を供給する水路は建物の脇にある庭と工場の間を通っている。工場の庭は畑も兼ねており、オリーブや葡萄も栽培していたという。

一階と二階部分は出来上がった紙を数え、梱包し、出荷の準備をする場所だが、住居でもあり、工場の所有者家族および下宿人・労働者とその家族が住んでいた。また、ここにはワインやオリーブ貯蔵庫、穀物庫も付属していた。三階と四階部分は地下で作られた紙を乾燥させる場所で、仕切り壁のない広い空間が広がっており、風通しをよくするために小さな窓が多数ある。

この建物がいつ建造されたかは正確にはわかっていないが、18 世紀の初頭であろうと推定され、紙工場としての役割を終えたのは1908 年から1910 年の間とされている<sup>6</sup>。

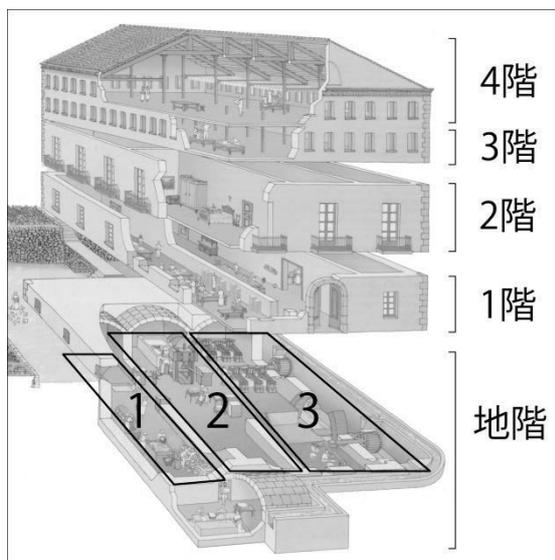


fig. 4 製紙工場の全体像



fig. 5 紙工場博物館の脇にある貯水池

## 2. 製紙の行程

ここで紹介する行程は、同博物館の学芸員による見学時の解説と、基本文献とした『カペジャーデスの紙工場博物館』を基にしている。

### 2.1. 材料の準備 1 (地階)

材料には麻 *cànem* (*cañamo*)、綿 *cotó* (*algodón*)、亜麻 *lli* (*lino*)でできた、衣類、縄や紐、船の帆のボロ *drapo* (*trapo*)などを使用していた。これらはボロ収集業者 *drapaire* (*traperia*)によって工場にもたらされるが、材料が現地で不足する場合も多く、輸送業者 *traginer* もこれに関わっていた。

材料が工場に入ると、破碎する前に手で小

小さくする作業があった。ボロは木の箱に集められ、衣類等の薄いものは箱に取り付けられた鎌 *dalles (dalles)* [fig. 6] で、縄などは両刃の斧の様な形状のマラッサ *marrassà* と呼ばれる道具で小さく砕かれる。ちなみにマラッサはもともと武器だったが、布靴業者が紐を裁断する際に使用するようになった道具だという。ここでは紙の材料となるか否かの選別も同時に行われる。



fig. 6 木箱に取り付けられたボロを裂く鎌

## 2.2. 材料の準備 2 (地階)

小さくされたボロはエスポルサドール *espolsador* [fig. 7] と呼ばれる装置に入れられる。木枠と金属製の網でできた八角柱の筒が横向きになっており、回転するように両端が支柱に支えられている。片方にレバーが取り付けられており、これを回転させることによって、ボロに混じった埃や不純物を遠心力で取り除くことができる。衣類等もそうだが、使用済みの縄などは特に泥や小石も混ざっており、これらを取り除くための装置である。

## 2.3. 材料の準備 3 (地階)

選別、不純物の除去が終わると、材料を水槽に漬け込む。この水槽はポドリドール *podridor* 「ボロ浸漬水槽」 [fig. 8] と呼ばれるもので、床よりも低くなっており、深さは70センチほどである。材料はこの中で1~5週間、

発酵させるために浸される。ポドリドールにはもともと腐らせるための場所という意味合いがあり、この後の行程で材料を打解しやすくするために発酵させる。写真の水槽は現在使用されていないため水がない状態である。



fig. 7 エスポルサドール



fig. 8 材料を浸しておく水槽

## 2.4. 打解 (地階)

水槽で時間をかけて軟らかくなった材料は打解の行程に入る。一般にスタンパーと呼ばれるこの装置 [fig. 9] はヨーロッパで長く使われ、アメリカ合衆国においても初期の入植者らが使用していたもので、ホルンダー・ピーター (以下、ピーター) <sup>7</sup> が普及する以前、広い地域で使われた <sup>8</sup>。カタルーニャではマセス・トゥリトゥラドーレス *maces trituradores* と呼ばれるが、木槌部分をマセス *maces*、石臼部分をピラ *pila* と別々で呼ぶこともある。

和紙における叩解にあたる行程だが、トゥリトゥラドーレスは打ち潰すための道具 (装置) という意味があるので、訳語としては「打

解」とする方がより適切であろう。



fig. 9 スタンパーが二列に並んでいる様子

スタンパーの木槌の先端部分は三種類の異なる形状をしており、図[fig. 10]の a から c の順で打解することで、材料から繊維を取り出すことができるのである。この行程には 20～30 時間かかるという。ここには六機のスタンパーがあり、現在も水車を動力として稼働する。写真では奥に手鍋が二つ掛けられた壁が見えるが、この裏手に水車が二機と水路がある。水車一機につき横並びになった三つのスタンパーを動かせる仕組みになっており、これが二列並んでいるのである。

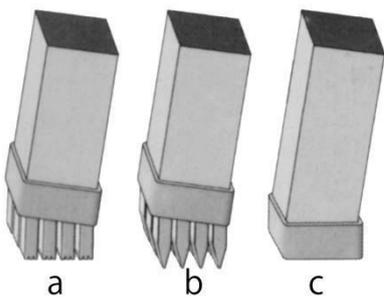


fig. 10 スタンパーの木槌部分の先端

これらの装置が動いている間は、石臼に計 18 本の木槌が振り下ろされ、材料を打ち潰しているため、凄まじい音でとても会話などできない。なお、水車と動力の仕組みについては後述する。

## 2.5. 紙漉（地階）

打解された材料は懸濁状の繊維となり、大量の水とともにティナ tina と呼ばれる漉き槽に移される。紙漉の行程はアラブレン alabrent 「漉き工」とポネドール ponedor 「伏せ工」と呼ばれる役割の職人が行う。

アラブレンは、フォルマ forma あるいはモトジェ motlle と呼ばれる漉き簀[fig. 11]を扱い、ポネドールは漉いた紙と布あるいはフェルトを交互に挟みながら重ねていく。筆者が博物館を見学した時には、紙を漉く作業で大型の漉き簀を使っており、アラブレンとポネドールが二人で同じ作業を行っていた[fig. 12]。



fig. 11 漉き簀とフィリグラナ（透かし模様）



fig. 12 二人掛かりで紙を漉く様子

漉き簀は木枠に金属製の網が取り付けられたもので、東洋における紙漉の簀の子にあたるものである。木枠自体に厚みがあり、大型のものは重量もある。また、透かし模様もこれに編み込まれている。漉き簀は製造する紙

の大きさに合わせてサイズが存在している。ビラの製紙工場が 18 世紀に稼働していた時代には、一日に 250 枚の紙を漉いたという。

なお、紙に付いた簀の目の跡をウォーターマーク、フォルマの網に編まれる金属の線状細工、つまり透かし模様をフィリグラナー *filigrana* と呼ぶ。補足であるが、フィリグラナーは製紙業に限らず、地中海で広く聞かれる用語である。例えば、イタリアのサルディーニャ島やポルトガルのいくつかの町では銀や金の装飾線状細工をフィリグラナーと呼ぶ。これらはフェニキア人が伝えたものとされており、古くから存在していた細工技術であった。

現在、紙工場博物館ではこの行程で材料と水を混ぜる際に日本のトロロアオイを混ぜている。東洋の紙と同様に薄くて均一な厚みを得るためであるというが、スペインの、少なくともカタルーニャの製紙関係者には「トロロ」*Tororo* の愛称で親しまれているという。

通常、トロロアオイが使われるのは、流し漉きの方法においてである。トロロアオイのネリは簀ですくった紙料液の透過速度を低下させるので、流し漉き特有の「汲み込み」や「調子」といった簀術操作が可能になる<sup>9</sup>。

カタルーニャで行われている手漉きの方法はヨーロッパでは一般的な溜め漉きで、この場合、漉き簀を動かすことはなく、紙料をすくい上げるだけなので、水は素早く透過する方が好ましいため、本来、紙料液に粘性は不要である。トロロアオイをどういった目的で使用しているのかは聞き取れなかったが、和紙について大きな関心があるヨーロッパでは材料を実験的に使用しているのかもしれない。残念ながらどこからトロロアオイを仕入れているのかを聞くことはできなかったが、非常

に興味深い出来事であった。

## 2.6. 圧縮（地階）

漉かれた紙は水分を多分に含んでいるため、プレス機 *Prensa* (*Prensa*)[fig. 13]によって圧縮してこれを抜く。



fig. 13 外に展示されている大型のプレス機

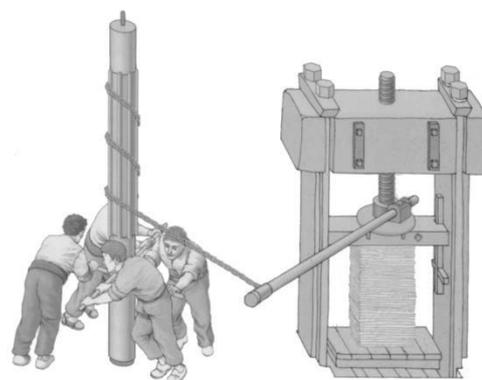


fig. 14 プレス機とウィンチ

プレス機からは鎖が伸びており、ウィンチ *Torn* (*Torno*)につながっている[fig. 14]。3~4人の男性がこのウィンチを動かして紙に圧をかける。ビラの製紙工場では一日に 18 回この行程を繰り返し、4,500 枚の紙を処理していた。水分を抜いた紙はサイアル *saial*、あるいはバイエタ *baieta* (*bayeta*)と呼ばれるフィルターで紙同士を分け、さらに余分な水分を切る。

## 2.7. 乾燥（三・四階）

水分を抜いた後、紙は一度乾燥される。三・

四階のミラドル *mirador*[fig. 15]と呼ばれる部屋はこのために空間が広くとられている。窓はいずれの階とも、長辺に 18 窓、短辺に 9 窓あり、非常に風通しがよく、乾燥にはうってつけの場所である。現在、最上階はレクチャールーム等に使われており、企画展示室にもなるという。三階部分は印刷と紙の歴史を伝える常設展示室となっている。



fig. 15 紙を乾燥させるミラドル (4 階)

なお、紙を干すための紐は高い場所に張られているため、エスピット *espit* (*espito*)と呼ばれる木製の T 字型をした道具[fig. 16]を使う。天井近くに張られた紐に紙を干す際は、手で掛けると湿った紙は崩れやすくなるため、エスピットの横木に紙を掛け、そのまま紐に掛ける。そうすると、形状を保持したまま干すことができるのである。エスピットに関しては、王立スペイン語アカデミーの辞書に、「製紙業者および印刷業者が使用する」とある。



fig. 16 エスピット (3 階の常設展示より)

## 2.8. サイジング (地階)

ミラドルで乾燥された紙は、サイジング

(滲み止め) のため再び地下に戻される。サイジング剤は動物由来のゼラチン、つまり膠 *cua* (*cola*) が用いられる。金属製の大鍋 *perol*[fig. 17]を使い、野兎などの皮を水で煮て膠を得、乾燥した紙をこれに浸け、再びプレス機[fig. 18]にかける。余分な膠を絞り出すためのこのプレス機は、紙を漉いた後で使用するものよりもやや小ぶりで、一人で動かすものである。このプレス機は膠をつくる大鍋の隣に設置されている。この行程の後で紙を乾燥させるときは地下に干す。調査ではこのサイジングの行程で用いる鍋は写真のものだけしか確認できなかったが、フランスのラランドによる『製紙術』(1820 年版)<sup>10</sup>の 4 葉図 1[fig. 19]にはこの行程に三つの鍋(右から、煮る、濾す、サイズする)を使うとしており、カペジャーデスの工場でも、他に使用していた鍋があったものと考えられる。



fig. 17 膠を得るための大鍋



fig. 18 余分な膠を搾り取るプレス機



fig. 19 『製紙術』に見える三つの鍋

## 2.9. 紙打ち (地階)

膠によるサイジングの後、紙打ち機 *mall setinador* [fig. 20]で最終的な処理を行う。200キログラムの重量をもつ紙打ち機の鎚によって紙を打つことで、これまでの行程でできてしまった紙の皺を伸ばし、きめを均一にし、光沢を与えることができる。東洋の筆の文化と異なり、ペンを使用する文化のヨーロッパでは、紙の表面に凹凸があってはならないので、この行程は極めて重要である。



fig. 20 紙打ち機

かつてこの工程は砥石などを使って手仕事で行われていた<sup>11</sup>。この機械も水車の動力を必要とするため、スタンパーと同じ水路側の壁面に取り付けられている。非常に興味深いのは、この機械の前には作業者が両足を入れられる「くぼみ」が空けられていることである。作業者は椅子に座ると同じ姿勢でこの作業を行うことができる。かつての作業者の中にはこの重い鎚によって指を落とす者もいたという。なお、この作業を経てもフリグラナが消えることはない。

## 2.10. 整形と梱包 (一階)

紙打ちを終えた紙は、一階に移され、出荷のために整形される。漉いた紙の四辺にある「耳」<sup>12</sup>を切り取る作業である。このためには台座 *banc de fretar* [fig. 21]に重ねた紙を横にして固定し、ナイフで余分な耳を切り取る。紙を固定する板の部品は紙の大きさによって交換するという。卓上のももあるが、写真の台座は人間が座れるほど大きい。



fig. 21 成形のための台座とナイフ

整形された紙は同様に一階で梱包される。梱包の際は一包みを500枚とするが、これをライメス *raimes* (*resmas*)という単位で表す。王立スペイン語アカデミーの辞書ではレスマ *resma*は「紙20マノス *manos*のまとまり」とある。このマノスは紙を数える単位のこと、1マノ *mano*は25枚を表すので、20マノスは500枚となるのである。西日辞典ではマノスの単位の説明として「(紙の)1帖」、「スペインでは25枚」<sup>13</sup>としており、日本における1帖、つまり美濃紙を48枚、半紙を20枚などと数える単位と同じ使い方がなされている。500枚ずつ梱包された紙の包みには製紙工場のラベルが貼られて出荷される<sup>14</sup>。

材料の準備から梱包まで、18世紀ヨーロッパの一般的な製紙工場の行程を経ているといえるが、ホルンダー・ビーター (以下、「ビーター」)の使用は見られない。ビーターはその名の通りオランダで1672年頃に発明されそ

の後 200 年ほどヨーロッパで使用されたというが<sup>15</sup>、カペジャーデス紙工場博物館の学芸員によると、カタルーニャでは 19 世紀までピーターは使用されず、「2.4. 打解」で示したスタンパーが使われ続けていたという。また、スタンパーの使用と手漉きをもって、「手仕事方式」*sistema artesanal*、ピーターと連続型抄紙機をもって「初期の機械化」*primera mecanització*としている。カタルーニャには、前述した通りラ・リバヤサン・ペレ・デ・リウデビトゥジェスといった製紙業が盛んだった町が他にもあり、それぞれの場所でのどのような特徴があったのかは非常に興味深いので、今後の課題としたい。

### 3. 水路および水車と水脈

セルバンテスの『ドン・キホーテ』には風車が登場するが、この風車をカスティジャ語ではモリーノ *molino*、カタルーニャ語ではモリー *molí* という。実は *molino* は水車と風車に共通して用いる用語で、「水車小屋」、「風車小屋」、あるいは「水車・風車を動力とする工場・作業場」等と訳すことができる。水車自体にはイドラウリカ *hidráulica*、あるいはルエダ・イドラウリカ *rueda hidráulica* (=水力の輪) という語があり、整理すると、「水車=イドラウリカを動力とした製紙工場=モリーノが稼働する」のである。ここでは、紙工場における水路と水車、そして水脈について簡単に紹介する。

水は貯水池から工場の外側の水路を通じて、三つの水車の上部へ流れる。最初の水車 [fig. 22] は紙打ち機を、残りの二つはスタンパーを稼働させる。水車には側面あるいは水車下部に水を流して駆動させるものもあるが、カペジャーデスでは水車のほぼ真上から水を

落として駆動させる。水が落ちる出口には弁があり、地下から水路へ出る出口に開閉レバーが付いている。水車自体は木製で直径が 140 センチほど、幅は 70 センチほどである。

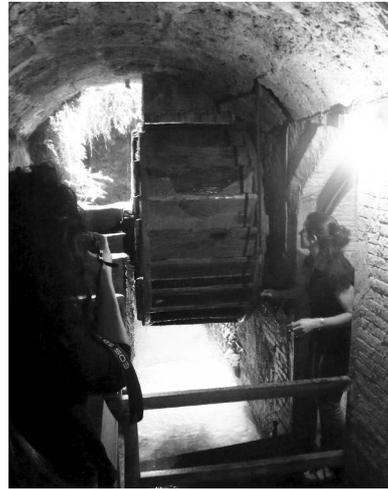


fig. 22 紙打ち機の動力となる水車

現在も水路、水車ともに機能しており、実際に学芸員がスタンパーおよび紙打ち機を稼働させてくれた。水車の下には排水のための水路があり、水はここから地下へと流される。 [fig. 23]

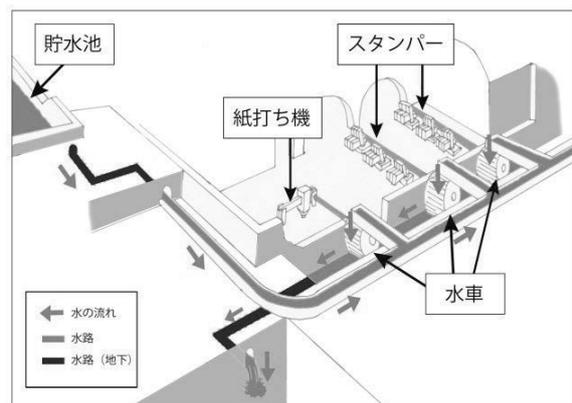


fig. 23 貯水池から水車への水の流れ

カペジャーデスは全長約 68 キロメートルのアノイア川 *Riu Anoia* に面しているが、紙工場で使用する水はこの河川から引いているわけではなく、地下水を利用している。町の背後にある低い山から三つの地下水が工場の貯水池で出会い、泉として湧き出す仕組みに

なっている。この場所はもともと自然に地下水が湧出していた場所であり、これを利用した貯水池なのである。湧き出る水は一日 1,200 万リットルにも達する。

こうした湧水は運河を通して他の紙工場へも送られ、無駄なく使われていた。この運河のシステムを利用した紙工場はカペジャーデスに全部で 16 棟あり、その総称をカタルーニャではモリノス・デ・ラ・コスタ Molinos de la Costa と呼ぶ<sup>16</sup>。中世にその起源を持つ水車の使用は、紙工場だけでなく、小麦やオリーブの製造所にも利用され、近代に工場が機械化されるまでの長きにわたりカペジャーデスの経済を支え続けたのである。

## おわりに

今回、筆者は美術作品の材料としてカタルーニャの製紙について調査を行ったが、製紙業についての研究は水源と水路や工場の建築構造、材料の供給や輸送システムといった非常に広範な分野を考慮せねばならないものであることがわかった。

バレンシア地方のアルコイの近くにあるバニェレス・デ・マリオリ Bañeres de Mariola でも調査を行ったが、ここでは製紙工場の跡地はすでに打ち捨てられており、工場自体の研究より、灌漑を含む水路の遺構等の研究が考古学的な観点から行われていた。

イスラーム時代のイベリア半島では南部から中部、地中海沿いを中心に多くの製紙工場が存在していたことを考えると、スペインの製紙について包括的な調査を行うのは膨大な時間が必要かもしれない。だが、カタルーニャとバレンシアを調査する中で、製紙業や特に地元の紙を扱う画材屋において多くの情報を得ることができた。今後はこうした情報源

を利用し、特に 17~19 世紀の地中海沿いにおける製紙について調査を行うつもりである。

## 【補説】ハティバと製紙

ハティバは、バレンシア市より 60km ほど南南西にむかった内陸にある。現在は人口 3 万人程度の小さな町である。この町には、ヨーロッパ初期の紙工場が存在していたとされることから、紙の歴史について語られるときに頻りに登場するが、その後製紙術は途絶えてしまう。

アラブの地理学者アル・イドリースー(1100-1165)<sup>17</sup>によって語られたハティバの紙についての言説が、ヨーロッパ初期の製紙工場がイベリア半島に存在していたことを物語っている。以下にスペイン語に訳された文を抜粋、引用する。

Játiva es una bonita ciudad con un castillo,[...] : en ella se fabrica el mejor papel, el que no se encuentra igual en el mundo. Se manda éste á oriente y occidente.<sup>18</sup>

ハティバは城のある美しい町である。(中略): この町では、世界でも同様のものがないほどに良い紙が製造されている。この紙は東洋、西洋に輸出されている。

もとはアラビア語で書かれているものをスペイン語に訳したものであり、この文自体はデニア Denia 市に関する古文書を集めた文献から引用したものである。これはハティバがレコンキスタによってキリスト教徒に奪還される前の 1151 年の記述とされている。この時代、アル・アンダルスのコルドバには巨大な図書館があり、イベリア半島におけるイスラーム文化は繁栄を極めていた。ハティバは紙の生産地の一つとしてアル・アンダルスにおいて非常に重要な役割を担っていたのである。

筆者はこの町の調査を行った際に、ハティバのアルモディ博物館 Museo del l'Almodí のマリア

ノ・ゴンザレス・バルドビ Mariano González Baldoví 館長にインタビューを行ったが、ハティバ自体には紙に関する文献などは残されておらず、町にはかつての水路の跡が残るのみだという。カタルーニャとは異なり、バレンシア、アンダルシアではその伝統は途切れているのだ。

とはいえ、ハティバで製紙業が途絶えた原因について、バルドビ館長から興味深い話も聞くことができた。12世紀のこの地域は、イスラーム世界であり、キリスト教徒は製紙には当初関わっていなかった。その後、レコンキスタによって1240年にこの町がキリスト教徒の手に戻った後も、製紙業にはアラブ人（モーロ人）とユダヤ人が従事し続けた。製紙業は身分の低い者の仕事であったため、キリスト教徒は直接に関与していないのである。

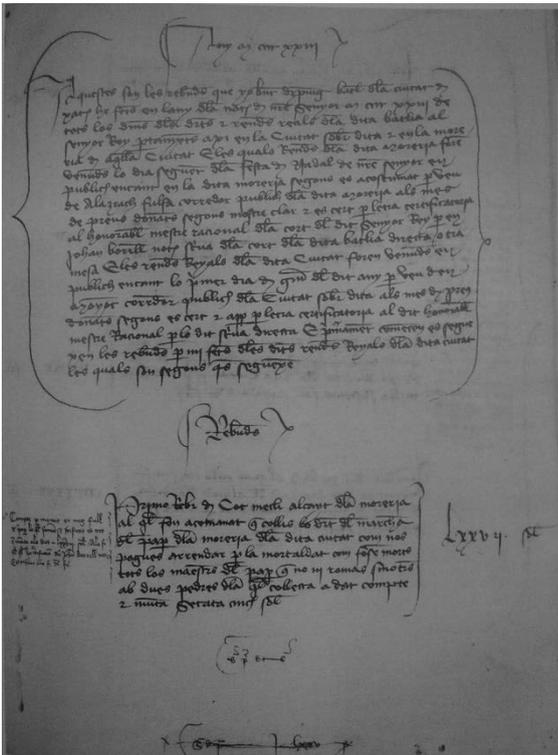


fig. 24 ハティバのペスト被害に関する文書

そうした中、1423年にペストがこの町を襲う。ハティバで猛威を振るったこの年のペストの被害状況が記された古文書<sup>19</sup>[fig.24]が残っている。古

語であり、筆記体であるため同博物館のバルドビ館長に通読してもらった。これによると、ハティバでの被害状況は甚大で、「紙の職工は全員死亡した」という。

この年のペストが、ハティバの製紙業を途絶えさせてしまった決定的な要因とは断定できないが、バルドビ館長によると、このことはハティバのみならずバレンシアで製紙業を衰退させる大きな出来事であったということである。

筆者は、バレンシア地方における製紙業の衰退が、レコンキスタの際の民族の交代によるものであったと考えていた。しかし、ハティバの調査ではそれだけでなく、災厄による製紙業の衰退という要因も聞き取ることができた。

ハティバはヨーロッパの最初期の製紙術について語られる際に頻出する地名でありながら、詳細に紹介されることは少ない。アルモディ博物館のバルドビ館長からは、アル・イドリースイーが生きた時代の資料は失われているが、前述したペストの流行があった1423年周辺の資料については現存するという情報をいただいた。

今後は、バレンシア公文書館などを中心に調査を行い、レコンキスタ以降のこの町の製紙術について追って報告したいと思う。

#### 【図版出典】

fig.4: 注4, p.5. (日本語部分は筆者が挿入)

fig.10: 注4, p.10. (アルファベットは筆者が挿入)

fig.14: 注4, p.11.

fig.19: 注10, pl.IX, fig.1.

fig.23: 筆者が作成

fig.24: 注19, p.27.

(かさはら たけし: 金沢大学資料館学芸担当職員)

- 
- <sup>1</sup> 本報告内の用語は、日本語の後にカタルーニャ語の原綴を付し、カステイジャ語に該当する用語がある場合は括弧付きで補うこととした。また、カタルーニャ語を一つの言語として扱うため、一般的なスペイン語をカステイジャ語と表記して区別している。
- <sup>2</sup> Biblioteca Nacional, ed., *Ydioma Universal: Goya en la Biblioteca Nacional*, 1996, Madrid, Spain, pp.299-311.
- <sup>3</sup> ハティバ Játiva はカステイジャ語であるが、バレンシア語ではシャティバと発音され、Xàtiva と表記される。
- <sup>4</sup> Ton Lloret, Magda Fernández, Victòria Rabal, Jordi Ballonga, *Museu de la ciència i de la tècnica de catalunya, el Museu molí paperer de Capellades, Quaderns de didàctica I difusió -18, El museu molí paperer de Capellades*, 2007, Barcelona, Spain.
- <sup>5</sup> Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Española*, 21.ed., 1992, Madrid, Spain.
- <sup>6</sup> Ton Lloret, *op.citp.*, pp.4-5.
- <sup>7</sup> 1672 年頃、オランダで発明されたボロ紙料調成用のピーター。叩解機と精製機を兼ねており、スタンパーよりも微細で均一な紙料を得ることができる。
- <sup>8</sup> 尾鍋史彦他編『紙の文化事典』朝倉書店, 2006, p.55.
- <sup>9</sup> 尾鍋他前掲書、pp.325-327.
- <sup>10</sup> Joseph Jérôme Lefrançois de Lalande, *Art de faire le papier: Nouvelle édition, Augmentée de tout ce qui a été écrit de mieux sur ces matières ... Par J.-E. Bertrand ... Extrait de la Description des Arts et Métiers, faite ou approuvée par MM. de l'Académie Royale de Paris; Ornée de planches en taille-douce*, 1820, Moronval, Paris, France.
- <sup>11</sup> ピエール＝マルク・ドゥ・ピアシ著、丸尾敏雄監修、山田美明訳『「知の再発見」双書 129 紙の歴史』創元者, 2006, p.70.
- <sup>12</sup> カステイジャ語では紙の耳を、紙の髭 *las barbas del papel* と呼ぶ。
- <sup>13</sup> この用語についての記述は、『改訂版 現代スペイン語辞書』（白水社,1999）および『西和中辞書』（小学館,1990）より引用している。
- <sup>14</sup> Ton Lloret, *op.citp.*, pp.8-13.
- <sup>15</sup> 尾鍋他前掲書、p. 37.
- <sup>16</sup> Ton Lloret, *op.citp.*, pp.6-7.
- <sup>17</sup> アル・イドリースィー *al-shrīf, al-Idrīsī, al-Idrisi*, はアラブ人の地理学者であり、1154 年に完成させた『世界各地を深く知ることを望む者の慰みの書』（別名『ルッジェーロの書』）でも有名である。cf. 大塚和夫『岩波イスラーム事典』岩波書店, 2002, p.147.
- <sup>18</sup> Don Roque Chabás, *El archivo : revista literaria seminal*, Tomo primero, 1887, Denia, Spain, p.373.
- <sup>19</sup> *Xàtiva, els Borja: una projecció europea*, Tomo 2, 1995, Játiva, Spain, p.27.